雪と月の恋

一条夕日

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
雪と月の恋

【Ｎコード】
Ｎ９６４０Ｈ

【作者名】
一条夕日

【あらすじ】
蓮城家に居候する天城美月。同居人である蓮城雪乃は麗しい容貌の少年。そんな彼は概ね優しいけど、少し意地悪で・・・

1話　意地悪な同居人

食卓である二人掛けの小さなテーブルからは食欲を誘う香ばしい香りが立ち上っていた。机上に並ぶのは家庭的で素朴な料理の数々。熟練した主婦の腕前を彷彿させる出来栄えには恥じる要素など何一つ見当たらないが、エプロンを脱いで椅子に腰を下ろした天城美月は、対面に座る人物の顔色を窺わずにはいられない。

美月の正面に座っているのは麗しい容貌の少年である。特徴的なのは、絹糸のように柔らかく揺れる艶やかな髪と、幼い頃には人形と見違えたに違いない端正な顔立ち。今は冬の夜空に浮かぶ月のような冷えた眼差しで虚空を眺めている少年の瞳は、時に慈悲深い天使のような温もりを持ち、またある時には狡猾な悪魔のように残忍な輝きを宿すこともあった。

彼の名は、蓮城雪乃という。一年前から蓮城家に居候している美月は、時々意地悪だけど概ね優しい人として雪乃を認識していた。ただ、今のように冷淡な顔をしている雪乃にはどこか近寄り難く、どのように接すればいいのか、いつも戸惑ってしまう。

「あの、蓮城さん、用意出来ましたよ？」

おずおずと声を掛けると、雪乃の視線がチラリと動いた。向けられた眼差しに射抜かれるような気配を感じた美月は、反射的に瞼をきつく閉じて肩を竦ませたが、恐々と目を開けると、雪乃の表情は和やかになっていた。

「美月、食事の前に頼んでおきたいことがあるんだ。聞いてくれるかな？」

テーブルに両肘を突いて手を組んだ雪乃。語り掛けてくる声はとても穏やかだ。その声に安堵した美月は強張っていた身体を弛緩させながら頷いた。

「えっと、私で聞けることなら」

美月が世話になっているのは住居に限ったことではない。例えば、

美月が居候を始めてからの生活費は全て雪乃が負担してくれている。家事を担っている報酬だと雪乃は言うが、私用でも必要だろうと多額の小遣いまで渡してくれる待遇は、どう考えても労働と等価の条件ではなかった。

雪乃に受けている恩は家事を請け負った程度では返しきれない。出来ることは少ないが、雪乃の一助となれるなら協力を惜しむつもりはなかった。

「では、明日デートしよう」

「はい？」

平然と告げられた言葉に思わず答えた美月だが、言葉尻には辛うじて疑問の色が響いた。そんな返事でも既に了解を得たものと判断したのか、夕食に手を伸ばし始める雪乃。遅れて食器を手に取った美月は言葉の意味をじっくりと吟味している最中で、理解した途端に驚愕の声を張り上げた。

「で、デートって、私と蓮城さんがですか！？」

「厄介な問題があってね。それを解決するため、君に協力してほしいんだ」

質問の内容とはやや食い違った回答。気が動転していたとはいえ、美月の心中には懐いて当然の疑問が浮かび上がっていた。本人も知らぬ間に頬が帯びていた熱は、やはり本人が知らぬ間に冷め、顔を染めていた驚きを怪訝さが上塗りする。

「その……どういうことでしょう？」

「先日とある女性から告白されたのだよ。興味がないので断ったのだが、相手は諦めがつかないらしい。いくら言葉で説得しても効果がなくてね。ならば手段を変えて説得しようと考えたわけだ」

これだけで情報は事足りる、というように雪乃は言葉を切った。語られた事情と、美月をデートに誘うという行為。それらを材料にしばし黙考した後、美月は導き出された結論を口にした。自覚のない落胆に、僅かに声を沈ませて。

「……つまり、既に私が蓮城さんと交際していることにして諦めて

頂く、ということですか？」
「そういうこと。僕の彼女として君を紹介する必要があるので、明日のデートには件の女性も同行することになる。そうでなければ意味がないからね」
　要するに、雪乃は付き纏う女性を振り切るために美月とデートするということ。それを理解して、今度は自覚出来る悲しみが美月の胸を満たした。
「最初に全部話すべきだったね。都合が悪かったかな？」
　美月の顔色を見て取った雪乃が、別段悪びれた様子もなく問う。雪乃に罪悪感がないのも仕方がない。彼は最初から彼女役を演じる役者として美月を誘っただけ。強いて彼の落ち度を挙げるなら、事情の説明が後回しになったことくらいだろう。
「いえ、大丈夫です。私でよければお付き合いします」
　どんな事情があろうと、雪乃に協力する意思は変わらない。顔に表れていたかもしれない悲しみを、美月は微笑で覆い隠した。
「助かるよ。それでは、明日に備えて少し練習しないといけないね」
「練習、ですか？」
「明日の僕達は仲睦まじい恋人を演じなければならない。そのためには普段と違った行動も要求されるだろう。あまり時間はないが、万全を期すならば、少しでも練習しておくに越したことはない」
　なるほど。確かに雪乃を恋い慕う女性を諦めさせるならば、雪乃と美月の間に入る余地がないと思わせる必要がある。薄い壁を隔てたような普段通りの態度では、美月がいくら恋人と言い張ったところで介在の余地を埋めるのは難しいだろう。指摘されるまで気付かなかったが、美月としても事前の練習に異論はなかった。
　だが、具体的には何を練習するのか。十六年の人生に交際経験を一切持たない美月には考えが及ばなかった。
「わかりました。夕食後にでも、すぐに練習してみましょう」
「いや、君の練習は今からでも出来るよ」
　そう言って箸を置いた雪乃はじっと美月の顔を見た。

「美月はいつも僕を『蓮城さん』と呼ぶだろう。まずはそこから改善しよう。そうだな……君は敬語が標準だから、試しに『雪乃さん』と呼んでみてくれ」
「いいですけど……」
了承したが、美月の口はそれ以上動かない。雪乃から注がれる眼差しが、これから名前で呼ぶ行為を殊更に意識させ、美月の羞恥を煽っていたからだ。頬を仄かに染めて口籠る様子を見た雪乃の面持ちには意地の悪い喜悦の色が混じり、美月は余計に恥じ入って口を噤んでしまう。
「まだかな？」
焦れたわけでもないだろうに雪乃が催促する。何もこんなときに意地悪しなくてもいいのに。俯きがちになった美月の面持ちにはやるせない羞恥や不満が表れていたが、美月の心中を察しているであろう雪乃が視線を逸らす気配はない。
「あの、じっと見られていると恥ずかしいですよ……」
「明日にもこういうことがあるかもしれないだろう。それを克服するための練習だよ」
抗議の声も軽く受け流されてしまう。雪乃の性質が悪いのは智に秀でて話術にも長けていることだ。意地の悪い行動は理不尽なようでも理に適った動機がある。美月の押しが弱いこともあって、論戦となれば雪乃の独壇場だった。
しかし、隙がない一方で雪乃は甘い。美月を苛めても最後には必ず救いの手を差し伸べてくれる。
「美月、そんなに恥ずかしがることはないよ。同じ家で暮らし始めてもう一年。僕達は恋人ではないが、名前で呼び合うくらいは不自然でもない間柄だろう。遠慮深いのは君の長所でもあるが、家族のように気軽に接してくれた方が僕は嬉しいよ」
優しく諭して、雪乃は食事を再開した。その視線はもう美月には向いていない。興味を失って投げ出したのではなく、口にするタイミングを美月に譲渡した感じだ。見放された不安はなく、ただ待っ

てくれている安心感があった。
　こういうのは、本当にずるいと思う。突然の優しさが胸に染みる。それに、あんな言葉を掛けられて嬉しいのは美月の方で、思わず名前で呼びたくなってしまうではないか。雪乃が巧妙なのか、自分が単純なのか。どちらにしても、彼は結果が分かっていて口にしたに違いない。だから、雪乃はやっぱりずるい。
「……雪乃さん」
　程無くして美月が名を呟く。まだ恥ずかしさは拭えなかったが、それでも口にすることが出来た。
「うん、よく出来ました」
　恥じらいに縮こまった小さな声でも、雪乃は満足気に笑みを浮かべて美月を褒める。子供に掛けるような口調は少しくすぐったいけど、それも含めて心地良かった。また名前を呼びたい。そう思ってしまうほどに心が温かい。
　緊張も解けて、口元を綻ばせた美月が食事を再開する。そこに雪乃が声を掛けた。
「それでは、もう一つ練習しておこうか」
　まだ食事中に練習出来ることがあるのだろうか。一つ課題を終えて心にゆとりを持った美月は、小皿に取り分けた料理を口に運びながら雪乃の言葉に耳を傾けていた。
　もう食事を終えたらしく、最後にお茶で喉を潤した雪乃は一つ咳払いをして表情を凛と引き締める。テーブルに肘を突いて身を乗り出し、真摯な眼差しで美月を見つめ、囁くように口にした。
「愛してるよ、美月」
「……っ！」
　完全に不意打ちだった。ろくに咀嚼していない料理が喉を詰まらせる。涙目になって咳き込む美月は慌てて顔を逸らして口元を手で押さえた。間一髪で口内の料理を吐きだす失態は避けられたが、一度乱れた呼吸はまだ荒く、肩は小刻みに震え続けていた。
「美月、大丈夫かい？」

席を立って歩み寄ってきた雪乃がお茶を差し出してくれたが、その顔は満面の笑顔に彩られていた。彼はこの展開を予期していたに違いない。

未だ口元から手を離せない美月は、今更ながら改めて実感していた。

やっぱり、雪乃は意地が悪い、と。

2話　初めての喧嘩

夕食後のキッチンには蛇口から迸る水音と、ダイニングとの間を往復する足音だけが響いていた。泡立ったスポンジを手に食器を洗うのは美月。食卓から食器を運ぶのが雪乃。普段は雑談交じりに作業を進める二人はこの日、黙々と手足だけを動かしている。

「美月、これで最後だよ。それからテーブルも拭いておいた」

食器を運んできた雪乃が美月の傍らに並び立った。美月は素気なく顔を背けて、無言のまま雪乃から一歩分の距離を取った。不機嫌さを露骨に表わす美月の態度はまるで拗ねた幼子のようだ。片や保護者の如き落ち着きを保つ雪乃は、美月の刺々しい態度を苦笑一つで受け止めてしまう。

「夕食の席でのことは僕が悪かったよ。少し悪ふざけが過ぎた。そろそろ機嫌を直してはもらえないかな？」

美月が広げた距離をそのままに雪乃が言った。相手の顔色を窺うでもなく毅然とした態度で謝罪を口にする様は、彼の際立つ風貌も相まって、とても十六歳とは思えない貫禄を帯びている。

しかし、美月は雪乃の神妙な謝罪も容赦なく黙殺した。相手を拒絶するという観点で見れば、何の反応も示さなかった今回の対応は、露骨に不機嫌さを表した先程以上に深刻さを増していると言える。

事実、あまりにも平然とした雪乃の態度に美月の憤りはより一層に昂っていた。既に彼女の怒りは事の発端である夕食の席での一件とは別の方向に向いている。自分がこれほど怒っているのに、焦燥や困惑の色を一切見せない雪乃の態度が気に入らないのだ。今の美月の胸に蟠るのは、憤りと呼ぶにはあまりにも鬱屈とした不満の感情だけだった。

それでも、家事に慣れた手は淀みなく動いていた。程無くして洗い終えた二人分の食器を乾燥機に並べ、その後にも美月は次々と作業を進めていく。最後にシンク周辺の後片付けを終えた美月は濡れ

た手をエプロンで拭い、黙って作業を見守っていた雪乃の脇を足早に通り過ぎようとした。肩が触れ合いそうな距離を擦れ違う。
その瞬間、雪乃の手が動いた。美月が気付いたときには、既に雪乃の右手が美月の右手首をしっかりと掴んでいた。足を止め、首を振り向けた美月が力任せに腕を引いても、雪乃の手は僅かばかりにも緩むことはない。美月は威嚇するようにムッと顔を顰めたが、今度は雪乃が黙ったまま、一向に手を離す気配がない。
「……離してください」
渋々、美月が声を出した。
「駄目だよ。話を聞いてくれるまでは逃がさない」
美月の剣幕に怖じることなく、雪乃は拒否した。美月の双眸はより鋭さを増して雪乃を睨み付けていたが、数秒と経たず自ら視線を逸らした。睨み合いで気圧されたわけではない。そもそも、雪乃は美月を睨んでいない。相手を慈しむかのように、温かな眼差しで美月を見つめていた。その眼差しは、ただ拗ねているだけの美月が直視するには真摯に過ぎていた。
「美月、どうすれば僕を許してくれる？」
雪乃の声はやはり落ち着いていて、美月が期待する焦りや戸惑いは微塵もない。そんな雪乃の余裕が美月の不満を募らせる。
とはいえ、美月も分かっているのだ。自分の不満は理不尽な我儘に端を発していて、雪乃には何の落ち度もないことを。だからこそ、美月は今まで何も言葉を返せず、謝罪を受け入れる事もないまま、無視という態度を貫いてきた。
だが、雪乃が強引に話し合いの機会を作った以上、もう無言で誤魔化して逃げ続ける事も出来まい。ここで決着させない限り、雪乃が手を離すことはないだろう。けれど、自らの身勝手を自覚してさえ、美月が素直になるのはまだ難しかった。
「……別に、怒っていません」
目も合わせぬまま、頑なに意地を張り続ける美月が呟いた。
「そういうことは相手の目を見て話すべきではないかな？」

なおも逃避に縋る言葉は、相変わらず穏やかな声音の雪乃が一言で斬って捨てた。質問の体裁を兼ねていた雪乃の声に美月は答えない。身勝手な不満の傍らに寄り添っていた後ろめたさを筋の通った言葉に刺激されて、けれど自分の非を認めるのは悔しくて、悲しくて、気まずそうに顔を背けただけだった。

雪乃が言葉を重ねる事もなく、キッチンは静寂に包まれた。美月の頭はいつしか俯いていて、視線は足元に落ちていた。気分が沈むと、頭が自然と下を向くことがある。今の美月がまさにそうだった。暗く淀んだ心は重く、沈黙も、空気も、何もかもが重かった。

そのとき、小さく息を吐く音が聞こえて、美月の右手首から温もりが消えた。不意の喪失感に思わず美月が手首へと目を向ける。引き止められてから初めて視野に収めた手首からは、薄れゆく温度と感触だけを残して雪乃の手が離れていた。それはあまりに突然のことで、美月の口からは「え……？」と戸惑いの声が漏れた。

まだ仲直りしていないのに、どうして――？

予期せぬ事態に美月が茫然としていると、傍らを何かが通り過ぎていった。未だ自失の最中にある美月が緩慢に首を振り向けて、通り過ぎていった何かを目で追う。

そこには雪乃がいた。雪乃は美月に背を向けて、キッチンと一続きになったダイニングへと足を運び、一度も振り向くことがないまま廊下へと出ていく。美月は何が起きているのか理解出来ないまま、音もなく閉じゆく扉を見つめていた。

雪乃が手を離す直前に吐いた小さな溜息。胸の奥底から吐き出したかのような重い吐息は、美月の態度に呆れ果てた雪乃の感情が表れていたのかもしれない。美月の態度など痛痒にも思わず、雪乃は悠然と構えているように見えていたが、内心では頑なに意地を張り続ける美月に愛想を尽かし始めていたのではなかろうか。

考えるごとに背筋を冷たいものが走り抜け、焦燥が胸を焦がした。底なしの穴に落ちていくように、美月の思考は一つの方向に加速していく。じっとしているのは辛いのに、恐怖に竦んだ足は一歩も動

けない。
だが、静寂の中に立ち尽くす美月の内側で、誰かがそっと囁いた。
――あの子がいなければ良かったのに。
その声が耳の奥に響いた一瞬、美月の身体は固く強張った。長い間意識の奥底に閉じ込めていた苦い感傷が声と共に溢れ出し、ついに美月の不安を弾けさせる。雪乃の許しを得られない恐怖にも勝る圧倒的な焦りが、硬直していた美月の身体を突き動かした。
駆け出した美月は身体をぶつけることにも躊躇せず、半ば体当たりする勢いで扉を開いて廊下に飛び出した。雪乃は自室に戻ったはず。無意識に判断して薄暗い廊下を走ろうとしたその瞬間、ろくに前を見ていなかった美月は何かにぶつかった。衝突の反動で倒れそうになる美月の身体を、何かが咄嗟に支える。
「そんなに慌てて、どうしたのかな？」
正面から聞こえた和やかな声。体勢を立て直した美月が顔を上げると、そこには雪乃が立っていた。怒って離れていったはずの雪乃の顔には柔らかな微笑が浮かんでいて、美月は自分の目を疑って何度も瞬きを繰り返した。
「……あの、蓮城さん？」
茫然と美月が呟いた。
「何かな？」
笑みを浮かべたまま、雪乃が小さく首を傾けた。美月の身体を支えた雪乃の手は、まだ左の肩に触れている。その温もりと感触を肌に感じてさえ、美月には目の前の光景が自分に都合のいい虚像と思えてならなかった。
「……怒って、ないんですか？」
やはり茫然と美月が呟いた。雪乃は浅く頷いて、後を言葉が継いだ。
「美月がなかなか素直になってくれないから、一芝居打ってみたの

だよ。押して駄目なら引いてみようと思ってね。だから、僕は怒ってない」
「怒って、ない……」
確認するように美月は一度呟いた。それは例えるなら一滴の水だった。不安で乾いていた心にゆっくりと安堵が染み込んでいく。だが、限界まで張り詰めていた緊張の糸はそれでも簡単に切れてしまった。弾みで溢れた涙が一筋頬を伝っていく。一度溢れだすと、もう止まらない。堰を切ったように次々と溢れてくる。
これには、さすがの雪乃も意表を突かれたらしい。ほんの僅かだが目を見開いて、必死に涙を拭う美月を見ていた。
「美月？」
声を掛けられて、美月の両肩が小さく跳ねた。
「ごめんなさい。私、嫌われたかと思って……でも、蓮城さんが怒ってないから、安心して……だから……」
慌てて弁解する美月の口調は嗚咽が混じってたどたどしかった。何か言葉を継ごうとしていた声は途切れ、後には堪え切れない嗚咽だけが漏れ続けた。
顔を伏せて、肩を震わせながら泣き続ける美月。溢れる涙を拭い切れず目元を覆うだけとなった両手を、雪乃が片方ずつ、そっと外した。戸惑う美月が泣き濡れた顔を上げるより先に身体を抱き寄せて、頭を自分の肩口に優しく導いた。
「そういえば、美月と喧嘩をしたのは初めてだったね」
雪乃が懐かしむように言った。彼の右手は美月の身体を抱き、左手は美月の後頭部に添えられている。その驚きには涙さえも止まり、美月は瞬き一つ出来ないまま雪乃の言葉に耳を傾けていた。
「大丈夫、これくらいで嫌いになったりしない」
だから大丈夫、と続けて、雪乃は宥めるように美月の頭を撫で始めた。男性にしては雪乃の手は繊細で、それでも美月の手より大きく温かかった。その手が繰り返し美月の頭を撫でていく。コトンっ、と何かが胸に落ちてきて、美月の目にまた涙が浮かんだ。

胸の奥の鼓動も、息遣いも聞こえる、雪乃に一番近い場所。
この上ない安心感に包まれた美月は雪乃の服の端を固く握り締めて、声も殺さず静かに泣き続けた。

3話　不安が辿り着く場所

蓮城家のリビング。顔を伏せてソファに座る美月の前に、琥珀色の液体で満たされたティーカップが置かれた。ティーカップを乗せたソーサーが、ガラステーブルに触れて硬質な音を立てる。音に反応した美月は視線を持ち上げて、花模様をあしらった白磁の器を見つめた。まだ乾き切っていない目元は微かに赤く腫れている。

紅茶を淹れた雪乃もティーカップを片手に持って、美月の隣に腰を下ろした。肩は触れないが、お互いの手をソファの上に置けば必然と重なるような距離だった。

「美月も飲むといい。気分が落ち着く」

そう言って雪乃が左手のティーカップを口元に寄せる。促されて、美月も無言のままティーカップに手を伸ばした。持ち手を握ると、カップから漂う熱を指先に感じる。淹れ立ての紅茶はまだ飲める頃合いではなさそうだ。美月は口を付けず、そっと息を吹き掛けて小さな湖面を揺らした。扁平なカップの中で綺麗な波紋が幾重にも波立つ。

幾度か繰り返した後、美月は程良く冷めた紅茶を口に含んだ。渋みは少なく、控えめな芳香と共に仄かな甘みが広がる。二口ほど飲んで、美月はカップから口を離した。味わいの余韻を感じる口からは感嘆の吐息が漏れる。不思議と心地は紅茶を飲む前より落ち着いた気がした。

「……美味しいです」

「セイロンのキャンディは癖が少ないからね。紅茶に慣れていない人でも、ストレートで飲みやすいんだ」

美月の感想に雪乃は満足気な微笑を浮かべ、ティーカップを揺らしながら簡潔な説明を口にした。

雪乃には朝食前と夕食後に紅茶を飲む習慣があり、休日には手作りの菓子を添えて一人きりのお茶会を楽しむこともある。彼の習慣

は幼少の頃から続いているらしく、長く嗜んだ紅茶に対する知識も深いようだ。
おそらく今回の茶葉の選択は、紅茶に不慣れな美月を気遣ってのことだろう。その気遣いに感じ入りながら、美月はもう一度カップに口付ける。時間と紅茶に癒されて、面持ちは次第に上向き始めていた。
その様子を見ていた雪乃も自分のカップに口付け、ゆっくりと中身を飲み干していく。程無くして空になったティーカップをソーサーの上に置いて、雪乃は改めて美月に目を向けた。
「さて、落ち着き始めて早速に申し訳ないが、あまり夜が遅くなると明日に差し支えるだろう。少し明日の予定を話しておこうか」
改まった前置きに美月は頷き返し、雪乃に倣ってティーカップを手放した。早くも美月の味覚を虜にし、一息に飲むことを憚られた紅茶は、まだカップの中に半分ほど残っている。雪乃は名残惜しそうにティーカップを見つめる美月を少し笑って、「気にせず飲んでいて構わないよ」と告げて本題に入る。
「明日のデートだが、最初に例の女性を交えて三人で食事をすることになっている。場所は守谷公園通りにあるイタリア小料理店ベネディーレ。僕達はお昼前に家を出て、それぞれ十二時までに現地に到着する」
「それぞれ、ですか？」
美月は耳聡く聞き咎めた。雪乃は頷いて先を続ける。
「僕は少し用事があるのでね、明日はお昼まで君と別行動することになる。待ち合わせの時間には遅れず合流するから、あまり気にする必要はないよ」
言葉通り、雪乃は美月と別行動を取ることを問題視していないようだった。雪乃には明日のデートに対する気負いが微塵もないのだろう。
だが美月は違う。見知らぬ第三者の前で雪乃の恋人を演じることには並みならぬ重圧を感じている。想像しただけでも緊張を誘われ

るのに、心を落ち着けることが出来る最後の一時に雪乃が隣にいないのは、些か以上に心細い。用事があるなら仕方がない、と自分に言い聞かせたものの、頷いた美月の面持ちは不安の翳りを残していた。

「――続きだが、食事の後の予定は特に決まっていないんだ。上手くすれば食事の最中にも相手が諦めてくれるかもしれないからね。まだ諦めないようなら、守谷公園通りや守谷駅周辺を散策することになると思う。食事以降の段取りが具体的にはないので、説明出来るのはこのくらいしかないんだが、他に質問はあるかな？」

当然、聞きたいことはあった。水を向けられた美月はすぐに尋ねる。

「えっと……ベネディーレで合流した後にも、私と蓮城さんが別行動を取ることは、ありますか？」

質問の声が途切れると、リビングがしんと静まった。雪乃にはこの質問が意外だったらしい。僅かばかり眉根を寄せて、何か思案するように右手を顎に添えた。もしかすると、別行動することをまだ不安視している美月に呆れて、説得する方法でも考え込んでいるのかもしれない。

聞かない方が良かったかもしれない。沈黙が長くなるにつれて、美月は少しずつ後悔していった。

だがふとした瞬間、膝上にあった美月の左手に雪乃の右手が添えられた。

「大丈夫、デートが始まったらずっと君の傍にいる」

穏やかに、されど心の闇を払うような調子強い声で雪乃が言った。その顔は柔らかな微笑に彩られている。手を重ねたのも、優し過ぎる言葉も、美月の不安を察した彼なりの励ましなのだろう。しかし、普段以上に親密な行動で示された優しさに、そして頼りがいのある雪乃の姿に、美月の頬は自然と熱くなってしまう。

「……はい」

熱に浮かされて言葉が上手く出ない。蚊の鳴くような声で返事を

した美月は、気持ちを落ち着けようとティーカップに手を伸ばした。すっかり温くなった紅茶を一口飲む。温度の変化が味にも影響したのか、緊張と高揚が入り混じった気分は少しも落ち着かない。美月は残りの紅茶を惜しまず飲み干した。

空になったティーカップをソーサーに置く。その視界の端に雪乃の手が映った。やや前屈みになっていた上体を伸ばした後にも、雪乃と交わす言葉が見つからなくて、美月は何気なく膝上の手を見つめ続けた。

「美月、頬が赤いね」

その耳元に顔を寄せた雪乃が囁いた。いつの間にか嗜虐的な笑みを口元に刻んでいた彼の声は、聞く者の心がふわりと浮くような色香を漂わせていた。

「そう、ですか？」

視線を雪乃とは逆方向へと逃がした美月は、言葉を濁して誤魔化した。指摘された頬の熱には自覚がある。それどころか、上半身を寄せた雪乃と肩まで触れ合ったために全身が熱くなり始めていた。身体の熱は恥らう自分を指摘されたことで余計に高まっていく。

「手もこんなに熱い」

言葉に合わせて、雪乃は美月の手を甲の上から軽く握り締めた。

「緊張しているのかな？」

「あの、蓮城さん、こういうのは……」

緩く締め付けられた手を見下ろして美月が言った。声に含まれた戸惑いは雪乃も察したことだろう。だが、雪乃の手は離れなかった。より深い繋がりを求めるように、手の平を合わせて指を絡めてくる。そうして深く噛み合った手を握り返す余裕は、美月にはない。

「こういうの、美月は嫌い？」

「そういうわけでは……ないですけど」

途切れそうになった返答にポツリと言葉を足した美月は、そのまま口を噤んだ。雪乃と手を繋ぐのは、嫌ではない。どちらかといえば嬉しい。けれど、恥ずかしい。

雪乃の厚意で成り立っている現在の関係。居候に過ぎない自分はこれ以上を望める立場ではないと、ずっと気持ちを戒めてきた。しかし、それは臆病な自分に対する言い訳だったのかもしれない。こうして手を繋ぐことの是非を求められただけでも、恥ずかしくて返事一つまともに返せない。彼の反応が怖くて、素直になれない自分が少し悔しい。

膝上で空いていた美月の右手が固く握り込まれる様子を見ていた雪乃は、寄せていた身を引いて、握っていた手をそっと外した。

「じゃあ、美月からしてくれないか？」

「え……？」

思わぬ提案を受けて、美月は雪乃に目を向けた。

「明日の練習。恋人らしいこと、美月はしてくれないのかな？」

「恋人らしいことって、言われても……」

すぐには思い浮かばない。期待を含んだ雪乃の眼差しを受けた美月は、自分に何が出来るだろうと自問し始めた。その矢先、宙に逸れようとしていた視線が一点に留まる。優雅な弧を描いた、雪乃の唇に。

「何か思い付いた？」

陶然と唇に見入っていた美月に声が掛かる。

「な、何でもないです」

素気なく言い捨てて美月は顔を逸らした。声を掛けられるまで注視していた場所も、見つめながら思い描いていた内容も、雪乃には悟られたくない。けれど熱い息を漏らす唇は妙に切なくなっていた。美月は思案する素振りを装って、人差指の側面でそっと唇をなぞった。

「……まだ美月には難しかったかな？」

悩み続ける美月の様子を眺めていた雪乃が、頃合いを計って口を挟んだ。子供扱いする口調には少し反感を覚えた美月だが、色恋に疎いのは揺ぎ無い事実である。控えめに唇は尖らせたものの、それ以上は反発することなく頷いた。

「大丈夫、美月にもわかるようになるよ」
すっかり普段通りの穏やかな声音に戻った雪乃は、美月の頭を優しく撫でてソファから腰を上げた。その左手にはティーポットを持っている。雪乃は不満顔で見上げてくる美月に軽くティーポットを掲げて見せた。
「随分気に入ったみたいだからね。良ければお代わりでもいかがかな？」
この提案に美月は一瞬で表情を綻ばせた。が、上手く乗せられた事実に気付き、単純な自分を恥じてすぐに面持ちを伏せる。そんな美月の反応は、雪乃の予想に違わぬものだったのだろう。彼は取り立てて反応を示すことなく、ただ穏やかに微笑んでいた。
「それでは、君の期待に応えるとしようか」
恭しく一礼した雪乃が背を向けてソファを離れる。普段はリビングとダイニングを仕切る壁の役割を果たしている四枚の引戸。そこを通った雪乃はダイニングを経由して、キッチンへと消えた。
引戸を開閉する音を確認した美月は、賢しい雪乃と単純な自分、双方に向けた溜息を漏らした。静かな部屋の中では小さな息遣いも耳に響く。寂しいくらいの静寂の中、都合良く誘導された不満はすぐに霧散し、リビングに一人残された美月の意識は思考の海に沈んでいった。その海を漂っていたのは不意に恋人を演じてみせた雪乃と、それに翻弄される自分の姿だった。
大人びた小悪魔のような恋人として大胆に振る舞った雪乃。手を繋ぐ程度で動揺しない彼には普段から歳に似合わない落ち着きがあって、充分以上に優しい。きっと演技などしなくても素敵な彼氏に見えるだろう。
一方の自分は手を繋ぐだけでも余裕がなく、演技と分かっていても恋人らしいことは何一つ出来なかった。こんな自分が他人の目を欺いて恋人を名乗ることが出来るのか。考えると不安で仕方ない。
ふと時間が気に掛かり、キャビネット上の置き時計に目をやる。日付が変わるまで、残りおよそ二時間。表情を硬くする美月の前

で、置き時計がまた一つ、時を刻んだ。

4話　重なる背中

緊張のまま迎えたデート当日。美月が守谷駅に到着したのは、午前十一時を少し過ぎた頃だった。

辿り着いた正確な場所は、守谷駅前通りに面した駅東口。その広場の中央にある時計台の下で美月は足を止めた。蓮城家を出てから、ここに至るまでの移動手段は徒歩。およそ二十分歩き通した身体が一つ小さな息を吐く。心身が落ち着いたところで、美月はまず時計台を見上げて時刻を確認し、それから周囲の景色を見渡した。

賑やかな喧騒に包まれた繁華街。歩道を溢れそうな人の往来。人混みを嫌う美月には気が滅入る光景だ。それでも今は、雪乃のいない自宅で一人緊張に耐えるより、こちらの方が幾分か楽に思えた。守谷駅周辺の地理を把握している美月が充分過ぎる余裕を持って家を出たのも、余暇を使って少しでも気分転換が出来ればと期待してのことである。

身の上が居候であるため浪費は控えているが、美月とて多感な年頃の少女だ。洒落た洋服や可愛いアクセサリーには興味があったし、雪乃に少しでも満足してもらえるように料理に関する情報だって収集したかった。それらの行動は完全に緊張を拭うには至らなくても、軽減するには充分な効果が望めるはずだ。

もちろん、本来の目的に支障を来たすつもりはない。ベネディーレがある守谷公園通りは守谷駅前通りに交わる通りの一つで、ここ東口広場からは徒歩で十分と掛からない場所にある。散策に夢中になることがなければ遅刻することもないだろう。

さて、どこから見て回ろうか。幾つかの候補を脳裏に浮かべていたその最中、右肩に提げたショルダーバックから電子音が鳴り響いた。美月は慌ててバッグの中を手探り、これだと思う感触を掴んで取り出した。

予想通り、音の発生源は美月が居候を始めて間もない頃に雪乃か

ら買い与えられた携帯電話だった。電話番号やメールアドレスは雪乃の他にも知人や友人に伝えてある。しかし雪乃とは同居しており、指で数え切れる程度の人数しかいない知人や友人は、いずれとも頻繁に連絡を取り合う間柄ではない。美月も使用料を気にして私用を避けているため、この携帯電話が着信音を響かせることは滅多になかった。

だが、その携帯電話が着信音を鳴り響かせている。重大な予定を後に控えた現在、美月との通話を試みる相手は一人しかない。

「もしもし、蓮城さんっ？」

そのように直感した美月は、ディスプレイに表示されていた相手の名前も確認せずに雪乃を呼んだ。が、繋がった先で雪乃は沈黙しているのか、賑やかな周囲の喧騒だけが聞こえてくる。

「あの、蓮城さん……もしもし？」

どうして黙っているのだろう。美月が怪訝そうに眉根を寄せて再度呼び掛けたが、通話先の雪乃は依然として沈黙を通している。

何かがおかしい。不審に思った美月が正面の気配に気付いたのはそのときだった。

耳元に寄せた携帯電話を見るように、視線を右手側に向けていた美月が正面を見る。そうして視野に入ったのは誰かの胸部。頭を上向けて視野を持ち上げると、そこにはやたら無愛想な印象が目立つ顔があった。顔立ちは決して鋭利ではないが、周囲より頭一つ飛び抜けた長身と感情の希薄な表情には、見る者を怖じさせる迫力がある。もし初見であったならば、美月も肩を竦ませて小さな悲鳴くらい上げていただろう。

だが幸いにも、この少年とは顔見知りだった。不意の登場に驚きはしたが、美月の反応は目を丸くする程度でしかない。

「雪乃じゃなくて残念だったな」

美月と同じように、耳元に携帯電話を当てていた少年が抑揚のない声で言う。肉声とは別に、携帯電話を通して少し変質した声が美月の耳に届いた。呆気に取られたまま、美月は携帯電話のディスプ

レイに目を向けた。そこには通話中の相手、古賀巧（こが たくみ）の名前がしっかりと表示されている。
「……近くにいたなら、直接声を掛ければいいではないですか」
雪乃からの連絡ではなかった。今にも溜息を漏らさんばかりに脱力した美月は早々に通話を切る。
「相変わらず冗談が通じないな。そこが面白いんだが」
反省の色もなく、巧も携帯電話を仕舞い込んだ。彼は雪乃の友人である。一見すると対照的に見える二人だが、お互いに気の置けない仲らしく、巧は雪乃に招かれて幾度も蓮城家の敷居を跨いでいた。表に出る感情は起伏に乏しいが、巧が時折見せる悪戯心は、当然ながら雪乃に通じるものがある。
「それで、何か御用ですか？」
気を取り直し、携帯電話を仕舞おうとバッグに手を差し入れながら美月が尋ねた。
「別に。珍しい場所で見かけたから声を掛けてみようと思っただけだ」
答えた巧は美月を頭の天辺から爪先まで眺め下ろした。身体を舐めるような卑猥さは微塵もないが、彫刻でも相手にしているような無味乾燥の眼差しというのも、女性としての矜持が微妙に傷付く。耐えること数秒、美月は不快そうに眉を顰めた。
「……何ですか？」
「いや、普段とは雰囲気が違って見えた気がしたのでな」
答えつつ、巧は下から上へと視線を持ち上げた。何か言い足りない様子で言葉を切っていた彼は、美月と目を合わせた瞬間に何気ない口調で問う。
「これから雪乃とデートか？」
質問された直後、とくん、と心臓が高く跳ねたような気がした。同じ事実でも、誰かに指摘されると、自分で意識するのとは違った緊張を感じる。恥ずかしいけれど、どこか嬉しい。不思議な感覚だった。

だが、デートというのは本来の目的を達成する手段。雪乃の彼女としての立場も今日を限りとした偽りである。自分がただの演者に過ぎないという現実が脳裏に過った途端、高揚していた心は暗く淀み、ほんのりと頬を染めていた美月の表情も凍り付いた。一秒にも満たない硬直の後、微笑の兆しを見せていた口元が儚げな自嘲の笑みを刻む。

「デートでは、ないですよ」

淡々と、声を絞り出す。声は思いのほか平然としていたが、先の間隙と合わせて、巧が不自然さを感じ取るには充分だったようだ。顔色こそ変えていないものの、巧が釈然としていないのは雰囲気で伝わってきた。

「……不躾な質問だったようだな。済まない」

それにも拘らず、巧は詮索を控えて謝罪を口にした。感情を表に出さない性格への苦手意識は拭えないが、それ以上に好ましい印象があるのは、彼がこうした引き際を弁えていることも要因の一つなのだろう。対する美月も普段の柔らかい微笑を浮かべて、気にしていないという意思を無言の首肯で示した。

続けて、美月が口を開く。

「古賀さんは、駅前に何か用事でも？」

「用事といえば、用事だな」

周囲の喧騒に飲まれる前に切り出された新たな話題に巧も応じた。お互いが暗黙の間に了解して努めたとおり、気まずい空気は残らなかった。だが、答えを濁した巧の応答に、今度は美月が首を傾げていた。不思議がる挙措を見て取った巧が先んじて口を開く。

「それより、天城はまだ時間に余裕はあるのか？」

「時間ですか？」

呟いて、美月は時計台を見上げた。守谷駅到着後に確認してから、まだ数分程度しか経過していない。ベネディーレに赴くまでには、まだ充分な時間があった。

「ええ、まだ大丈夫ですよ」

「どのくらい？」
再びの質問。美月は時計台を見上げたまま思案した。
「そうですね……三十分くらいでしょうか。十二時前には守谷公園通りに行かないといけないので、守谷駅の周辺からは離れられませんけど」
「三十分か。ただ待つには少々長いな……」
いつの間にか一緒に時計台を見上げていた巧が呟いた。その横顔を、一足先に視線を戻した美月が見ている。静寂の空間でも正確に聞き取れたか分からない小声は周囲の音に掻き消されたが、巧が何か考えているらしいことは美月にも分かった。その巧もやがて視線を戻し、やはり何気ない口調で言う。
「暇潰しくらいなら付き合えるが、どうだろう？」
「え？」
「……無理にとは言わないが」
鳩が豆鉄砲を食らった。そんな形容が似合う呆け顔の美月を見下ろした巧が、一歩引いた調子で誘いの言葉を続ける。間を嫌うように発せられたその言葉は、返事の催促なのか、それとも無理を強いるまいとする気遣いなのか。淡々とした巧の声からは言葉以上の意味が読めない。
「無理ではないですけど……その、珍しいですよね？」
予想外の申し出に対して戸惑いを隠せない美月が、相手の反応を窺うように言った。
「何が？」
「古賀さんからお誘いを受けたことって、今までになかった気がするので」
聞き返した巧に説明する美月の口調には、自分の記憶違いだったらどうしようという躊躇いが入り混じっていたが、語った内容も含めて特異な点はなかった。しかし、この返事に巧は何かを感じたのだろうか。説明を終えた後、美月には彼の口元が僅かに緩んだように見えた。

「それを言うなら、こうして二人だけで会うのも、外で会うのも、全部が初めてだろう」
その表情のまま巧が言う。これも珍しく、巧の口調からは今更のような美月の言葉を楽しんでいるような感情が窺えた。
巧は雪乃の友人だ。では美月との関係はどのように称されるのか。気兼ねなく話してはいるが、顔見知りと言うには近く、友人と言うには遠い。美月自身、漠然とした距離感でしか巧との間柄を表現することは出来なかった。強いて言うなら、他人以上友人未満だろうか。電話番号やメールアドレスを知っていても、お互いに連絡を取ろうとしたことは一度もない。今日のような偶然で出会うこともなく、雪乃を介したときだけ二人の縁は繋がっていた。珍しいことといえば巧が指摘した通り、蓮城家の外で、二人きりで顔を合わせていること自体がそうなのだ。
それは美月にも理解することが出来た。でも、それが巧の感情を表に引き出すほどのことかといえば、思わず首を傾げてしまいそうになる。
気のせいだろうか、と美月は巧の顔をまじまじと見つめる。これにはさすがに居心地の悪さを感じたのか、視線から逃れるように巧は目を伏せた。
「――それより、どうするんだ？」
やがて瞼を持ち上げた巧が、今度こそ申し出への返事を促す。
「えっと、古賀さんの用事はいいんですか？」
促された美月はこれが最後と、疑問ではなく気遣いからの問いを投げた。相手から申し出とはいえ、時間を割いてもらう立場としては確認を疎かに出来ない。そんな配慮も、やはり今更と感じてしまうのは、聞くのが遅過ぎたためだろう。再びの今更に今度は口元を緩めることなく、巧は淡々と答える。
「自分のことを棚に上げて誰かの世話を焼くほど、俺は人が好くない」
言葉は冗談めいていたが、説得力はあった。友人とは言い難い関

係だとしても、これでまだ遠慮を重ねるほど他人行儀な仲でもない。
「それでは、お願いします」と美月は軽く頭を下げた。
「わかった。どこか行きたい場所はあるか？」
「いえ、お任せします」
興味がある場所は幾つか候補を上げていたが、誰かと過ごす以上はお互いが楽しめるような場所に行きたかった。巧の趣味嗜好は知らないが、少なくとも料理本の立ち読みに満足する男ではないだろう。
「それなら、適当に歩いてみるとするか」
巧も同じ気遣いからか、お互いに無難と思える選択をし、美月も異論はないと頷き返した。同意を確認した巧は背を向けて、人が溢れる大通りへと歩き始める。長身の彼は歩幅も大きいはずだが、歩みはゆっくりとしていた。その理由に気付かないほど美月は鈍くない。
さり気無い気遣い。巧の後を追って歩き始めた美月には、大きさがまるで違う彼の背中が、何故か雪乃と重なって見えた気がした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9640h/

雪と月の恋

2010年10月10日14時19分発行